
INTERSECTION

狼木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

INTERSECTION

【Nコード】

N9614G

【作者名】

狼木

【あらすじ】

交差する物語 地獄のような物語 この物語の幕を上げるの

は誰か 降ろすのは誰か これは一夜の夢に集いし者達の物語

H a p p e n

御崎市御崎高校 この学校付近である事件が起きた。

『連続行方不明事件』 最初の被害者はこの近辺に住む女性だった。

夜7時頃女性は市内のレストランで友達と夕食を食べに行くと言って家を出たが、次の日になっても帰ってこなかった。

警察は一緒に夕食を食べた女性の友人に事情聴取を行ったところ10時にはレストランを出て自分はタクシーを拾って彼女の反対方向に帰ったらしい。

レストランの従業員やタクシートの運転手がそれを目撃している。

その次の日、今度はその友人が行方不明になったらしい。それから行方不明者はどんどん増え、事件から1週間たった現在で行方不明者は10人にまで増えた。老若男女問わずである。そんな事件が市内で起こったのだから当然市内の学校は部活の中止、集団下校を行っている。

御崎高校では「ねえねえ、聞いた？行方不明者10人だって。」

「これは当分部活はなしだね。」

「まじかよ！？大会近いのにどうすればいいんだよ。」

「また集団下校とかタリイよ」 などといった声が上がっていた。

「行方不明者10人か。なんだか最近物騒だな。ねえシャナ、どう思う？」

少年 坂井悠二 は隣いる小柄な少女に尋ねた。

「別に。」

少女 シャナ はぶっきらぼうに答えた。我関せずといった感じである。

「別について、何とも思わないの？」

「だってこんなのただの行方不明事件じゃん。それに行方不明者の存在が記憶に残ってるってことはこの事件は紅世の徒は関与してい

ないわね。ま、警察にでも任しておけば。それと悠二、今日の夜の鍛錬もいつも通りやるからね。」

「わかっているよ。にしても行方不明者10人か。警察はなにやってんだろうね。」

「その警察も今回の事件は結構本気らしよ。」

悠二が振り返るとそこには親友の池 速人がいた。

「よう、池。それより今のどういう意味？」

「こういうことだよ。」

そういつて池は悠二に新聞を見せた。

「なになに、“行方不明事件の捜査にあたっていた警官6人が行方不明に！これにより警視庁は特殊部隊を導入。また逃げ延びた警官によると犯人は20代の男性・口から血を滴らせ、牙があるとのこと”なんじゃこりや？まるで吸血鬼じゃないか」

「その通り。しかも犯人は6人の警官を抱えて逃走したとか。信じられるか？大人6人を抱えてダツシュだってよ。しかも吸血鬼崇拜団体やらマスコミが騒いで大混乱だって」

「なんかスゲーことになってるな。」

今は暢気に友達と雑談をしている悠二だが、まさかこの後、自分達がとんでもない戦争に巻き込まれるとは思いつかなかっただろう……

あれから大分時間が経ち今は夜中の9時。シャナと悠二は河川敷で鍛錬をしていた。「なあシャナ、今日はこのくらいにしないか？」

「言ったでしょ、いつも通りやるって。」

《たとえ本当に吸血鬼が現れたとしても、フレイムヘイズに勝てるわけがなかるう》そう言ったのはシャナのペンダント 天壤の劫火アラストールであった。

《それとも鍛錬がきつくて逃げ出したくなっただか？》

「そんなわけないだろ。朝はともかく、夜は存在の力の鍛錬なん

だから。」

《では何故だ？》

「怖いかもしれない。今さらこんなこと言うのも変だけど、やっぱり人間で未知の物が怖かったりするから」

「そんなに私が頼りない？」

「いや、別にそういう訳じゃ……」

「ならとつと鍛錬を再開するわよ！」 《待て！！》

シヤナが鍛錬を再開しようとしたとき、アラストールが叫んだ。

「どうしたの、アラストール？」

《何かがちちに近づいてくる！》

「何かつて？」

《わからない。だが危険であることは確かだ！》

「まさか、吸血鬼？」

「そんなことはどうでもいい。だけど、向かってくるのなら斬り捨てるだけ！」

そう言つてシヤナは夜笠から大太刀 贄殿遮那 を出し臨戦態勢に入った。悠二も宝具ブルートザオガーを出し臨戦態勢に入った。

次の瞬間 悠二たちの空間を突然ドームのような物が覆った。「な、これは！！！」

「封絶！？」

《馬鹿な！！気配は確かに紅世の徒でもフレイムヘイズでもなかった筈！！》

「じゃあなんで!?!」

「落ち着いて悠二! そんなことより今は目の前の敵に集中して!」

「そつだよ、気をつけないとケガしちゃうよ」

「!?!?!」

突然背後にニット帽を被りピアスを着けている男が立っていた。

「ニイヤアアハハハハハハハハハハ! 今のでお前ら二人とも死んでたぜ。」

男は高らかに笑いだした

「ちっ!」

シヤナは男に斬りかかった。が、避けられ、また背後を取られてしまった。

「おいおいしつかりしてくれよ。お前達に会うためにこの市内の間襲いまくったのによ。」

「何だつて! まさか、お前が!」 「そつだよ。このヤン・バレンタイン様がやったんだよ。こうすれば手っ取り早くお前らに会えると思ったんだが、フレイムヘイズってのは案外冷たいんだな。まったく、とんだ骨折り損だったぜ。」

「言いたいことはそれだけ?」

シヤナはヤンに刀を向ける。

「ずいぶん強気だね、二回も背後を取られたのによ。」

「フレイムヘイズを甘く見ないで。さっきは少し油断しただけ……
もう、お前ごときに背後は取らせない」
そう言うシヤナの構えには確かに隙が無い。

「ヒュウ 言うねえ！じゃあその言葉を確かめさせてもらおうかね
く、ヒヒヒヒ！」

ヤンはまた下品に笑いだした。

「悠二！サポートをお願い。」

「ああ！」「おいおい、そんなミステスに何ができるんだ？」

そう、悠二はミステス。シヤナの鍛錬のおかげである程度の存在の
力が使えるようになった悠二であるが、戦力と呼べるほどのものでは
ない。しかしその洞察力は鋭く、ただのミステスとは侮れない。シ
ヤンはそうは思っていた。

「悠二を甘く見ないで。これでも幾つもの修羅場をくぐり抜けてき
ただから。そんな悠二が戦力にならないわけない！！」

「シヤナ……」

それを見ていたヤンは

「そうかいそうかい。そいつあ悪かったな。それじゃあせつかくだ
からこれ使っちゃおう」 パチン、とヤンが指を鳴らすと魔方阵の
ような物が出てきた。

「これは！自在法！？」「なんで紅世の徒でもフレイムヘイズでも
ない奴が自在法を使えるの？答えて！」

「どうしてかって？俺に勝ったら教えてやるよ……！」

ヤンはP-90を二挺構えシヤナに発砲した。弾丸が雨のようにシ

ヤナに降り注ぐ。　だがシャナは迫り来る何十発もの凶弾を全て避け

「！！！！」

ヤンの背後を取った

「今のであんだ、死んでたわよ？」

「やるじゃねえか、フレイムヘイズ。ヒヒ、こりゃあもう少し遊ぶかな！！」

そのころ悠二は喰屍鬼どもと戦っていたが、あることに気付いた

(こいつらの服装…まさか、こいつらは行方不明になった人達！！)　すると悠二は攻撃をやめた。

もしかしたらこの人達を元に戻せるかもしれないとおもったからだ。幸い喰屍鬼の動きはかなりトロいからうまく時間を稼いで元に戻す方法を考えようとした。

だが、それをヤンが許すはずがなかった。

「何逃げてんだよ！」

ヤンは悠二に銃を向けた　その凶弾は悠二の足を貫いた。

「ぐっ！？」

「悠二！！！！」

「おめえもよそ見してんじゃねえ！！」

ヤンは今度はシャナに弾丸を撃ち込んだ

「はっ！！！！！！」

シヤナは避けようとしたが間に合わなかった…

それを見たヤンはまた下品に笑いだした

「ヒヒヒヒヤハハハハハハハハハハ！こいつぁいい！傑作だぜ！自分のボーイフレンドを助けようとしたら自分がそいつと同じ目にあつてんだからな！」

「くっ、ぐふっ！！」

「ほう、しぶといねえ。さすがフレイムヘイズ。資料通りだな。」

《資料だと？なんだそれは…お前は何者だ！！》

「だ〜か〜ら〜、勝つたら教えてやるつつつてんだろ。まあ、それも叶わぬ願いだったがな。だろ、フレイムヘイズさんよ？」

ヤンはシヤナの髪を掴んで持ち上げた。

「さあさあ皆さん！共食いシヨ一の始まりですよ！司会はこの私、ヤン・バレンタイン！そしてゲストは伝説の炎髪灼眼のフレイムヘイズ！そしてもう一人、その身に伝説の宝具『零時迷子』を宿すミステス、坂井 悠二君！これから悠二君は喰屍鬼に喰われてしまいます！ああ、なんてかわいそうなの！！ですがご安心ください、彼一人に辛い思いはさせません！この後喰屍鬼になった彼には恋人のフレイムヘイズを喰べてもらいます！そうすれば彼女も喰屍鬼になり、二人で仲良く人間どもを喰べてもらいます。ヒヒヤハハハ！」

「そ、そんな…いやだ、嫌だよ…悠…二…悠二イ…！！」

「うわああああ！！」「アツハハハハハハ！！無様だな、え？フレイムヘイズさんよ。なに安心しな、お前ももうすぐに喰屍鬼になるんだから。だからそれまで自分の恋人の最後の姿を見ときな」

ヤンは無理矢理シヤナの顔を悠二向かせる。そんな悠二に喰屍鬼どもは近づいてくる！

（悠二が喰屍鬼に喰われる…）シヤナは見ていられなかった。自

分が好意を抱いていた人が化け物に喰われる姿など…

しかし、それは杞憂に終わった……

その時！！頭上から1人の男と数え切れない‘何か’が雨のように降り注いだ。それは喰屍人に全て突き刺さり、喰屍人たちはピクリと動かなくなった。

男は神父の格好をしていた。

「な、何者だてめえ!?!」

ヤンは怒りと驚きが入り交じったような声で叫んだ。

「我らは神の代理人

神罰の地上代行者

我らが指名は我が神に逆らう愚者を

その肉の一片までも絶滅すること

Amen!!!!」

男は銃剣 バイヨネットを取りだし、それを交差して十字架のポーズをとった。

「い、今のセリフ、バチカン第13課>イスカリオテ<!!!だが、

何でてめえらが封絶の中に入れる！？てめえら人間のはずだぞ！！」
「ふん、我々が吸血鬼だけを絶滅させると思っただか。言っただ筈だ、我が神に逆らう愚者を その肉の一片までも絶滅させる、と。それは紅世の徒とて同じことよ。だから我らは何百年も前から紅世の徒と戦っている。だから封絶によって切り離された空間に入るための宝具だつてあるんだよ。」

「へえー、バチカンはそんなことも出来るのか。 じゃあこいつはどうかな。」

またヤンが指を鳴らし、たくさんの喰屍鬼を召喚した。 だがそれはただの喰屍鬼ではなかった。

「！！！！」

「まさか！！」

「ほう、武装した警察の特殊部隊か。 こいつは少しは楽しめそうだが！！」

「余裕かましてんのも今だけだぜ、おっさん！！」

ヤンの合図とともに武装した喰屍鬼たちは一斉に発砲した。 それらは全て命中し、神父は倒れた。

「ギャハハハハ！！カッコつけたくせにもう終わりかよ、おっさん。 ダセエな、おい！！」

ムヘイズの再生力は並みじゃないはず。」

アンデルセンは携帯を取りだし、本部に連絡した。「私だ。大至急御崎市の病院の手配と医療班を派遣してくれ。あと、フレイムヘイズの再生力を遅延または無効にする物質についても調べてくれ。」

ああ、そうだ、頼む。まったく、何がどうなってやがる……」

B r o k e n h i s … (前書き)

駄文で誠に申し訳ございません。

とある何でも屋でそれは起こった

ジリリリリ、ジリリリリリ、

電話のベルが鳴り響き、1人の少女がそれを取った。

「はい、デビルメイクライ。……はい、え？ダンテですか、ダンテは今シャワーを浴び、あ、戻って来ました。」　すると部屋に上半身裸の銀髪の男がタオルで頭を拭きながらやってきた。

「はいダンテ。どっかの学園の学園長からだよ。それよりちゃんと服着てよね。」　そう言っつて少女　パティは銀髪の男　ダンテに受話器を渡した。

「ヘイヘイ。もしもし。」

「君がダンテ君かね？」

ダンテが受話器を取るとそこから老人の声が聞こえてきた。

「ああ、そうだが。あんたは？聞いたところどっかの学園の学園長のようなが。」

「僕は近衛　近衛門と言っつてな、日本にある麻帆良学園の学園長をしておる。君に依頼したいことがある。」

「報酬は？」

「君の望む額で構わん。」

「破産しても知らんぞ」

「構わん、事態は深刻なのじゃ。引き受けてくれんかのう。」

「仕事の内容は？」

「最近麻帆良学園内で惨殺死体が多数発見されてな、目撃者による人ではない“何か”が人間を喰らっつとるらしい。」

「なるほど。」
『それともう一人雇ったのじゃが、なかなかの美人じゃぞ。』
「ほう。」そう言っただんては微笑み
「いいぜ、その仕事、引き受けてやるよ。」『では早速日本に来てくれ。飛行機はこちらで特別便を手配してある。では。』近衛門は電話を切った。

「それじゃあ旅の準備でもするかな。」

ダンテは服を来て準備を始める、と言っても荷物はキダーケースだけなのだが

「なになに、どっか行くの？」

「ああ、ちよつくら日本にな。しばらく店を空けるから勝手に入るなよ。」

「えゝ、いいなゝ、あたしも行きたい！」

「ばか、遊びじゃないんだ。」「ちえ、！じゃあお土産買ってきて！」

「無理だ。ピザのツケも払えないのに土産物なんか買えねえだろ。」

「ええええ！！ダンテのケチ！！」パティは駄々をこねていた。まったく呆れるダンテであったが、

「！！！！！！」

突然ダンテの顔が険しくなる。異様な気配を感じたのだ。

「どうしたのダンテ？」

「パティ、裏口からすぐに逃げろ」ダンテが静かに、しかし威厳のある声で言った。それに気付かないパティではない。パティは走って裏口から出ていった。パティが遠くまで逃げたことを確認したダンテ。

「隠れてないで出てきたらどうだ？こつちも暇じゃないんでな。」
そう言っただんてはコートを着ようとしたその時　ダンテを含む全てのものが止まった。着ようとしたコートは宙を舞っている。

そして扉から巨大な植物の蔦が出てきてダンテを捕らえた。地面からは巨大な蔦が無数に出ていて、その上に二人の子どもがいる。「この男がダンテ。伝説の魔剣士の息子とはいえ所詮この程度、口ほどにもないですわ。」少女 愛染他 ティリエルは微笑み、「でもでもティリエル、すごい存在の力だよ！！ボクこんなの初めてだよ！！」そう言って少年 愛染自 ソラトは涎を垂らした。「そうですわね。では兄様、戴きましよう。」
「へへへ、それじゃあいただきまあ」

チャキ

「え？」

ドン！！！！！！

チリン、と一個の葉莢が地面に落ちる。

「ぎゃあああああ！！！！！！」

「お兄様！！」（そんな！！奴は確かに動けなかったはず！！！！なのは何故……………ん？）よく見るとダンテの首に掛かっているアミュレットが光っている。

「そうか、そいつのせい……………」

「やっと出てきたか。しかし随分妙な事になってるな。何者だ？少なくとも悪魔じゃあないな。」

「私たちをあんな下品な奴等と一緒にしないで！！」「そうか？大して変わらないと思うが。」

「黙れ！！お前、自分の立場をわかってるの？そんな状態で」「何が出来るかって？」ダンテは右手を翳した。すると店から魔剣リベリオンがダンテの元に飛んできて

「こんなことが出来るぜ！！」ダンテは薦を切り刻み

「急ぎの用があるんでな。じゃあな！！」ダンテがティリエルに斬りかかるうとしたが

「！！！！」

倒したはずのソラトが現れたのである

「カッコいい剣だね。ボクに頂戴。」

「ガキはおもちゃで遊んでろ！！」

ダンテはソラトの剣を弾き、ソラトとティリエルに攻撃したが、ソラトがすべて叩き落とし、そのままダンテに斬りかかる。　　キーン！！！！　　とまた高い金属音が響く

「やるじゃあねえか坊主」

ダンテはリベリオンで攻撃を防いだ。しかし

「甘いよ。！！！！」

「なっ!?!」血の吹き出る音が封絶の中に響いた。

ダンテは確かにソラトの攻撃を防いだ。しかし何故かダンテの肩から血が吹き出している。

「これがお兄様のブルートザオガーの力。存在の力を込めることで、相手に傷を負わせる。あなたじゃあ私とお兄様は倒せませんは。」

「理屈はわからんが、接近戦はやバイってことか。それじゃあ!?!」

ダンテは銃を二挺構え

「こいつはどうかかな?」

「あら、そんなものが私たちに通用すると思つて?」

「試してみるか?」

ダンテは微笑みを浮かべている 余裕といった感じだ。

「……お兄様!?!」

ティリエルはそれが気に入らなかつたみたいだ。

「大丈夫だよティリエル。ボクが全部叩き落とすから。」ソラトもブルートザオガーを構える

「おもしれえじゃねえか、全部防いだらアイスでも買ってやるよ!?!」

それはまさに嵐のような攻撃だった。　　ダンテは何千何万という鉛弾を撃ち込み、ソラトはそれをすべて叩き落としている。

10分経つてもまだ続いている

決着が着かないように思われたその時!!!

「あっ!!!」

ソラトのブルードザオガーが弾かれ

ソラトの身体が蜂の巣のようになってしまった。

「お兄様!!!」

ティリエルはすぐにソラトの元に駆け寄った。（まずい!!!この傷を治すには存在の力が足りなすぎる!!!）

「よくも、よくもお兄様を………次は必ずあなたの存在の力、いえ、その前に地獄のような苦しみをあじわわせてやる!!!」ティリエル

とソラトは鳶にくるまれ、消えた。それと同時に全ての時間が元に戻った。

「やれやれ、また面倒なことになったな。それにしても」
「ダンテが後ろを振り返ると、そこにはボロボロになった自分の店があった。」

「こりゃ修理費が高くつくな。ま、あのじいさんは好きな額で構わないって言うてたし、ちょっと多めに貰、へっ、へっくしょん！！」
「！！」

ドドドドド、ガシアアン！！！！

「……………」

くしゃみにより店が倒壊した……………
「こりあちよっどどこるじゃねえな。」

RESOLUTION

御崎市病院

「ん、ここは？」（えっと、確か河川敷で鍛練をしていて　！！）

「そつだ！！！シヤナは！！！」悠二はすぐに身を起こし、辺りを見回した。すると隣にはシヤナがぐっすりと眠っている。（良かった、無事だったんだ。）悠二は安堵の表情を浮かべた

「悠ちゃん、良かった…心配したのよ。昨日の夜、通り魔に襲われて病院に運ばれたつて。たまたまお巡りさんが近くをとおったから良かったものの、本当に心配したんだから…」そう言って悠二の母坂井 千草は涙を流す。

「じゃあお母さんはご飯を持ってくるね。」千草はまたいつものように微笑み、病室を出ていった。

「アラストール、僕たちはどうして病院に？それに何でシヤナは

「それについては私が話そう。」髪を後ろに1つに結った白人男性が話しかけてきた。

「あなたは？」

「私はエンリコ・マクスウェル。昨夜君たちを助けたのは私の部下だ。」

>>>この者たちが病院も手配してくれたのだ<<<

「本当に、ありがとうございます。」

「いやいや、気にすることはない。」

悠二の謝罪に対して謙遜な態度をとるこの男に悠二は好印象を持った。

「話が逸れたね。何故彼女が眠っているか。理由は2つ。1つは体力の消耗。なに、命に別状は無い。直に起きるさ。」それを聞いて

悠二はホツとする。しかし疑問がある。何故回復力に優れたフレイムヘイズがここまで衰弱しているのか。あれくらいの怪我ならすぐに治るはず。

「2つ目はこれだ。」マクスウェルはビニールパックに入った弾丸を見せる。

「それがですか？」

「そう。これは彼女から抽出したもので、一見ただの弾丸だが実際は違う。これは存在の力を吸収する宝具、いや宝具擬と一体ほうがいいかな。」>>どういう意味だ？<<

「ほとんどの宝具は存在の力を込めることで機能するものだ。しかし、この弾丸は存在の力を込めなくとも機能し、標的の存在の力を吸収している。これは間違いなく“誰か”が作った物だ。」悠二とアラストールは驚きを隠せなかった。人間が独自にそんなものを造り上げたのだから。

「我々は昨夜の吸血鬼が自在法を使ったことから紅世の徒が関与しているものと断定し、調査を行っている。これは私の勘だが何か善からぬことが起きようとしている。我々は吸血鬼を殲滅する機関で、紅世の徒に関する知識は持ち合わせていても倒すことはできない。我々に力を貸してくれないか。」

悠二は考え込む。相手はこちらの専門であり専門外。また何時来るかわからない。それに向こうの狙いは不明だが、御崎市を中心に事件を起こしたということは狙いは自分達だと思っのが通常。ここは協力するのが妥当だろう。しかし、それにシャナが賛成するかが問題だ。

「うう、ここは？」悠二の隣で寝ていたシャナが目を醒ました。

「シャナー!!」

「悠……二……？どうして……こんなところ……!!」シャナの顔が険しくなる。昨夜のことを思い出したのだろう。

「大丈夫だよ。シャナ、聞いて欲しいことがあるんだ。実は」

悠二はシャナにこれまでのことを全て話し、これからどうするかについての自分の意見を話した。

悠二の意見にアラストールは>>うゝむ<<と難しく考えているようだった。無理も無い。紅世の徒以外の者と戦うのだから。しかし吸血鬼が自分達を狙ってきたという考えも妥当なものだろう。だが敵の目的、何よりこの男を信用していいかどうか。いろんな考えがアラストールを悩ませていた。しかし

「良いじゃない…あの吸血鬼には借りがあるし、向こうの狙いがあったらたちなら歓迎しなくちゃ。紅世の徒が関与しているなら尚更ね。」シャナは昨夜のことが余程頭にきているのだろう、その声からは怒りを感じ、拳を握りしめている。>>し、しかしだなシャナ、敵の狙いも解らずに迂濶に動く訳には…<<

「何か言った!!」

>>い、いや、何でもない…<<

あのアラストールが威圧された。悠二は今のシャナには絶対逆らわない方がいいと思った。「どうやら決まりのようですな。早速だが君たちにはバチカンに来てもらい、以後我々の指揮下に置き、命令に従ってもらうことになる。」

「ちょ、ちょっと待ってください！そんな勝手に」

「やかましい」

「!!--!!」

「法王猊下直々の命令とアンデルセンの勝手な行動がなければこんな薄汚い地で薄汚い貴様らと話しなどするか!!!いいか、あまり調子に乗るなよ、このミステス風情が!」

「……………」

「はっ！ついに本性を現したか。いつだってそうだ、お前みたいな傲慢な人間はこちらが下手に出れば調子に乗り、ボロ雑巾のように扱う。そして最後は天罰が下るもんだ。」

「おいおい、私たちは神に仕えているんだぞ。」

マクスウェルは呆れぎみに言った。バチカンの教皇庁に勤めている彼が天罰を受けるなど有り得ない。

「お前らの神が正しいとは限らんぞ。もしかしたら悪魔かもな。」

シヤナは微笑みを浮かべながら言った。

「こおのガキイ！！！」

さすがのマクスウェルも腹が立ったようだ。

「冗談だ。しかし、お前らのことは気に入らないが、吸血鬼はもつと気に入らん！！！」

昨夜のことをシヤナは思い出した。あんな屈辱は初めてだ。

「良いだろう、お前らの命令に従ってやるよ。ただし、私はフレイムヘイズだ、人間じゃあない。状況によってはお前を殺すし、お前をボロ雑巾のように利用する、それでも構わないな？」

「もちろん。我々もそのつもりだ。」

「それともう一つ」

チャキ

「悠二をモノ扱いした場合でもお前を殺す。」

シヤナは贅殿遮那をマクスウェルの喉元に突きつけながらそう言った。

「了解した。以後注意しよう。」

シヤナは贅殿遮那を夜笠に戻した。

「それでは来週の金曜日に空港で会おう。ちょうど君たちは夏休みに入っていると思うから。あと、親御さんのことは私に任せてくれればいい。まあ、こんなもんかな。それじゃあお大事に。」マクスウエルは病室を出ていった。

「ねえシヤナ。」

「ん？ふおうひは？（どうした）」シヤナは千草からもらったメロンパンを食べていた。

「……さつきはありがとう。」「！！！！／／／」

悠二の感謝の言葉と微笑みによりシヤナは顔を真っ赤にした。

「べ、別にいいわよ、あれくらい／／」

「でも、本当に嬉しかった。僕が物扱いされてあそこまで怒ってくれたから。本当にありがとう。」

「……………多分」

「ん？」

「あたしじゃなくても怒ったわよ。佐藤 啓作や田中 栄太、それと……………吉田…一美……………」

サアアアアアアと 病室に涼しい風が流れ シヤナの長い髪が靡く 「だから、気にしないでいいわ。」

二日後

悠二とシヤナは退院した。

学校では池や吉田が二人のことを心配していたらしい。吉田にいたっては泣き出してしまった、二人ともあたふたしたりと、楽しい1日だった。こんな日が続けばいい、悠二はそう思っただろう。しかし、彼はこんな日々は続かない、いや存在すら消えてしまうかもしれないとわかっていた。だから彼はあえてこの道を選んだのかもしれない。

5日後

「やあ君たち、よく来たね。」空港ではマクスウェルが待っていた。
「まあこれからの予定については機内で話そう。ファーストクラスだよ。」

「マクスウェルさん。」

「ん？」

「僕たちはこれからどんなところに行くんですか？」

「……………」

「……………私が指揮しているのはバチカン第13課イスカリオテ。ま、要は殺し屋だ。」

「殺し屋……………」

「……………」

「ま、君が行くのは本部の法王庁ではなく、ある男のいる孤児院だな。」

「その人の名前は？」

「アレクサンド・アンデルセン。」

「……………」

自分達を助けてくれた男である。

「あとは機内で話そう。何故そんなことを？」

「……………自分の…自分の選んだ道を再確認したかっただけです。それを聞いたシャナの顔はどこか嬉しそうだった。」

「自分の選んだ道、か……………その道はどんな道だい？」

「戦いの道です。」

HAVEN · T STARTED THE PARTY YET (前書き)

遅くなって誠に申し訳ございません。

HAVEN · T STARTED THE PARTY YET

成田空港

「ミスターダンテですね？」

ダンテが無事成田に着き、迎えの人間を探していたところ、細長いケースを持ち、髪を後ろに結った少女に声をかけられた。

「私は桜崎刹那と申します。あなたをお迎えにあがりました。」

そう言つて少女 刹那はお辞儀をした。

「挨拶はいい。急いでるんだろ？仕事の内容を。」

「はい。それについては列車内で話しますので、こちらへ。」

成田エクスプレス車内 車内は成田エクスプレスにしては珍しくガランとしていた。まるで自分達以外に客はいないので？とダンテは思った。

「仕事の内容は悪魔の殲滅です。報酬は電話で言った通り好きな額で構いません。そしてこちらが出現する悪魔の資料です。」

資料に載っている悪魔はどれも大したことは無さそうだった。少なくとも自分が今まで戦ってきた悪魔よりは遥かに弱い。これで借金を返済できて尚且つ店を建て替えられるのだから美味しい話だとダ

ンテは思っていた。

「なあ、この仕事にはもう1人雇っているんだろ？この程度の悪魔なら俺1人で充分だぜ。」

「もちろん、その事は承知しています。しかし、どうしても彼女の力が必要なのです。」

「どういう意味だ？」

「彼女の名はマージョリー・ドー。フレイムヘイズと呼ばれている者の1人です。」

「フレイムヘイズ？」

「そう。この世界とは違う世界の住人、紅世の徒という者達を倒し、世界のバランスを保つ元人間、と言えばわかりますかね？」

「…？」

ダンテはポカンとしていた。

「まあ、要するにあなたと似たようなものです。異世界の化け物を倒す存在、それがフレイムヘイズです。」

「……」

いきなり紅世の徒などと言われてイメージできるはずもなくダンテはまたポカンとなっていた。

「ちなみに紅世の徒とはあなたが出発前に戦った兄妹のことです。」

「!.....知ってたのか。」

ダンテはさつきとは違い鋭い目付きで刹那を睨んだ。

「ええ、何分今回のこの騒動はこれじゃあ終わりませんから。当然あなたにはこの騒動の『先』の者達にも戦ってもらいます。」

「なるほど、確かにギアラに見合った仕事だな。つか、俺が倒したガキ共が、その、何とかって奴なら尚更俺1人で平気だろ。」

「世界が滅ぶとしても？」

「どつという意味だ？」

「紅世の徒は人間が持っている『存在の力』を吸い取り、起こらないはずの事を起こします。そして、突然その人間の存在が無くなったらどうなります？また、それが大規模で起こったらどうなるか、おおよその見当はつきます。」

「なるほど、だからそのフレイムなんかやらは世界を守るために日夜頑張ってるっていうわけだ。」

「そついうことです。」

ダンテは疲れた表情をした。あれほど難解な話をしたのだ。それに
出発前での愛染の兄妹での戦いの疲労もあつたのだろう。

「フウ、にしても長話で喉が渴いたな。」

「それもそうですね。そろそろ売り子さんが通ってもいいんですが
ね？」

刹那は辺りを見回したがそれらしい人はいない。いや、それどころ
かこの車両には自分とダンテしかいないのだ。

「なあ嬢ちゃん。この列車に乗って人の気配はしたか？」

「いいえ、そういえば確かに……！！まさか……」

「ああ、そのまさかだ。」

ダンテは立ち上がりギターケースからリベリオンを取り出す。刹那
も愛刀 夕凧を出し、臨戦態勢に入る。

「来やがったな。」

ダンテがそう言うのと天井から魔方陣のようなものがあらわれ、糸繰
り人形のような悪魔 マリオネットが出現した。しかし、

「こりゃあ、ちとタイミングが悪いな。」

「たしかに……」
そう。今二人のいる場所は狭い車内、しかも、各々の武器が長物なのである。そして、目の前には悪魔が狭い車内にぎっしり。客席を壊してる奴もいる。ダンテが銃を二挺 エボニー&アイボリーを所持しているが、マリオネットの中にはそれが効かない者もあり、不利としか言いようがない。

「どうします？まったくの四面楚歌ですよ？このまま飛び降りて逃げますか？」

前も後ろもマリオネットでふさがっている。前門の虎 後門の狼とはこの事である。

「逃げる？ハッ！悪魔相手に逃げる必要なんかあるかよ！」

「じゃあどうすれば」「こつするんだよ……！」

ダンテはリベリオンを持ち一回転し、うじゃうじゃいたマリオネットを横に一刀両断した。

「な？」

「『な？』じゃないですよ……やるならやるって一声かけてくださいよ……！殺す気ですか……！」

「わりい、忘れてた。」

「わす、はあ、もういいです……！」

刹那は何か諦めたような表情になったが、すぐに切り替えた。

「これからどうします?」

「一車両ずつ悪魔を横に一刀両断するのは面倒だからこのまま天井を渡って先頭車両まで行ってブレーキをかける。あとはお楽しみタイムだ。」

「結構無茶苦茶ですけど、選択の余地は無いみたいですね」

周りを見るとすでに新手の悪魔に囲まれている。鎌や鋏を持ち、ふわふわと飛んでいるそれは死神を思わせた。数は5、6体といったところだろう。

「また厄介なのが来たな」

「
ダンテは相手が宙に浮いているため銃を構える。その悪魔 『シン』と『デス』 が一気に間合いを縮めダンテ達に襲いかかってくる、
が

「『神鳴流奥義 百烈桜華斬』!!!!」

刹那が剣を円を描くように振り、相手を一度にまとめて斬る『百烈桜華斬』を使い迫り来る『シン』と『デス』をダンテを巻き込みかけて真っ二つにした。

「おいおい、俺まで斬り殺すつもりかよ。」

「失礼、忘れてました。」

さっきの仕返しだと言わんばかりの表情とセリフである。

「言うじゃねえか。折角だ、どっちが先に着くか『競争』でもしねえか？」

「良いですね。じゃあ負けた方は罰ゲームということぞ。」

「良いぜ。そんじゃあ、お先に!!！」

言うが早いか、ダンテはすぐさま走り出した。走行中の列車の上を走っているわりにはとてつもないスピードだ。そうやって車両を3つ4つ通過すると車両の上に『シン』とは違う死神を連想させる悪魔 ヘルⅡプライド と赤い透明な悪魔 ブラッドゴイル がダンテの前に立ち塞がった。特にブラッドゴイルは厄介で斬れば斬るほど数が増えてしまう。

「お、こいつは良い…！」

「ヴオオオ!!!!！」

ダンテは後ろから襲ってきたヘルⅡプライドの攻撃を身を捻らせたジャンプで避け、そのまま攻撃に失敗して前屈みになったヘルⅡプライドの背中に乗り

「WOOHOO!!!!！」

スケボーのようにヘルⅡプライドを滑らせたり回転させたりしながら銃を乱射。ヘルⅡプライドは砂に、ブラッドゴイルは石になって落下し粉々に砕けた。

(ゴールまであと少し！)

と思った次の瞬間、列車がキキィーと高い音を出しながら急停止した。

「おおっ！！、と。」

ダンテは慣性の法則に従って転けそうになるも、リベリオンを突き刺してバランスを保った。

「勝負は私の勝ちですね」

なんと先頭の運転車両から刹那が出てきたのだ。

「おいおい、どんな魔法を使ったんだ？」

「さあ？でも、約束は約束ですよ。」

「わかったよ。で、何が望みだ？」「そうですねえ、それじゃあここにいて、と言ってもあと一体ですが、悪魔を退治してください。ただし、制限時間は2分です。」

「えらく短いな。」

「それでもしないと遊ぶじゃないですか。こっちは一刻を争うので」

「まあな。！…っとなやがったな…」

ゴーン、

ゴーン、と鐘がなる音と同時に黒い霧と不気味な笑い声も聞こえてきた。これまた死神みたいな、しかし今度は大きく禍々しいオーラ

を纏った悪魔 ヘルⅡバンガード が黒い霧から出てきた。

「しょうがねえ、『お楽しみ』と行くか！！！！」

「ウオオオオオ」

甲高い雄叫びを上げるとヘルⅡプライドはまた黒い霧に消えたかと思つと右の方から突然出現し、鎌を回しながら突進！！

ダンテが避けると、また黒い霧に消えた。今度は下、左、と消えては突進を繰り返す。

ダンテが避け続けていると今度は現れなくなった。

長い沈黙…そろそろ2分かたダンテが思っていたその時

「ウオオオオオ！！！！」

ヘルⅡプライドが後ろから鎌を渾身の力で振り下ろそうとしていた！！！！が、その鎌がダンテに届くことはなかった。

「毎回ワンパターンなんだよ、テメエは」

ダンテはいつの間にかリベリオンを抜いてヘルⅡプライドを縦に真っ二つにしていた。

「どうだ？」

「お見事、1分47秒です」

「記録更新か。で、連絡はついたのか？」

「ハイ、もう間もなく到着するそうです。コーヒーでも飲みます?」

「いや、それよりストロベリーサンデーの方がいいな。」

NEW GUEST

ローマ近郊

カトリック系孤児院

フェルディナンドルークス院

庭で仲良く遊ぶ子達、二人の子供を叱るシスター、その“普通”の光景に悠二は驚いた。あの化け物神父のいる孤児院だからもつとすごい想像していた。シャナもそれは同じようで、しまいには「アラストール、これも何かの自在法？」と聞いてしまうほどだった。

「ハハハ！そんなに驚いたかい。」

「いえ、まあ」

「なに、ここはただの孤児院だ。異常なのは我々第13課^{イスカリオテ}だけだ。それ以外はいたって普通だよ、このバチカンは」

マクスウエルの説明を聞いても悠二は「はあ」と答えるばかりであった。吸血鬼に襲われた自分とシャナを助けてくれたあの神父、病室でのマクスウエルの発言、これらが悠二のバチカンに対するイメージを固めてしまったのは言うまでもない。

「とにかく中に入ろう。」

応接室

「さて、だいたいの事は飛行機で話したが一応再確認だ。」

「はい」

「まず御崎市で起こったあの吸血鬼事件。ただ血を吸うだけの吸血鬼どもが自在法を操り、尚且つ宝具のコピーまで使うという前代未聞の事件。御崎市だけで起こったということは狙いは君たちと見て間違いないな。そして我々はいち早くその情報を入手し、現地にアンデルセンを派遣し、現在にいたるといいうわけだ。」

「1ついい？」

「ん？」

「あんたの話だと吸血鬼っていうのは自在法を使うことが出来ないみたいじゃない。なのにあの神父はあの晩、宝具を使って自在法の中に侵入した。まるであの吸血鬼が自在法を使えるのが予めわかっていたみたいじゃない。」

「さすがフレイムヘイズ、鋭いな。いいだろう、話して差し上げよう。今から遡ること50年前、第二次世界大戦の事だ。敗戦したナチスドイツから大量のナチの軍人達が国外に逃亡した。」

「ナチス？」

「そう。君も学校で勉強したろ？」

確かに悠二は世界史でナチスについては勉強した。しかし、それはヒトラーの独裁政治やユダヤ人大量虐殺といったもので、今回の事件と関わりがあるとは思えない。

「続けるぞ。そこでナチ戦争犯罪人を救援する組織や国外ドイツ人がその逃亡の手助けをした。」

「それが？ちよつとした戦争マニアなら知っていそうな話だけど。」

「今回の吸血鬼事件、明確な計画性、それなりに大規模な事件、おそらくは組織によるものだ。」「まさか！！」

「そう、その逃亡した大量のドイツ人に紛れ混んでいたのが今回の主犯、『ミレニアム』だ。」

《10世紀？》
ミレニアム

「ミレニアムとは計画名、そして部隊名だ。ナチスの極秘物資人員移送計画とその実行者達だ。」

「極秘物資人員移送計画……」

「だけどそれだけじゃないわね。」

《やはりか》

「その通り。表向きは…それすら裏だが、それだけじゃない。そんなものは『コレ』に比べれば些細な事でしかない。」

「『コレ』？」

「そもそも本来は物資計画なぞ、『コレ』のための資金集めでしかない」

そういつとマクスウェルはテーブルに書類を置いた。

「『吸血鬼製造計画』!!!!」

「『秘匿名 最後の大隊〔LATZTBATTALION〕』!!」

《吸血鬼を造るだ?!?そんなことが可能なか!!!》

「ああ、普通に考えれば不可能だ。しかし奴らは成功した。現に君たちの前に現れたのがその成功例なのだから。」

「!!!……あいつが」

「原理は不明だが、ある組織が関与しているのはわかった。」

《その“ある組織”とは?》

「仮装舞踏会「バル・マスケ」」

「なっ!!」

「アイツラが!?!」

仮装舞踏会「バル・マスケ」 紅世の徒が作った世界最大規模の組織。その目的は不明だが、御崎市を『存在の泉』にしようとしたり、悠二の零時迷子を奪おうとしたことなど、シャナたちとは因縁の深い相手である。

「マクスウェルさん、何故フレイムヘイズでもないあなたが仮装舞踏会を？」

「紅世の徒は我々の殲滅の対象“内”だ。彼らの存在は数百年前から知っていたし、一部のフレイムヘイズとは連絡だつて取っている。そのため仮装舞踏会の行動は出来る限りチェックしていたのだ。」

悠二たちは最初は驚いたがよく考えれば納得がいく。人間の中にはフレイムヘイズを援助する外界宿>アウトロー<だつてあるのだ。その中にバチカンも入っているのだろう。

「マクスウェルさん、もうひとついいですか？」

「ん？」

マクスウェルは紅茶を飲みながら視線を悠二に向けた。

「あなた方が紅世の徒や仮装舞踏会について知っているのはわかりましたし、納得もできます。けれど、何故ミレニウムについてはそこまで詳しいのです？」

そう。ミレニウム、これについてはあまりにも知りすぎている。それにまだ『吸血鬼が自在法を使ったのが何故わかったのか』というのも話していない。その事に気付いたのはシャナも同じらしい。マクスウェルへの視線がそれを物語っている。

「何故かつて？手助けしたからさ。我々バチカンが、強力にね。」

嬉しそうな、楽しそうな表情でマクスウェルは答えた。

「手助け！？一体何を考えているの！！」

マクスウェルの話した事実のせい、それとも彼の表情が癢にさわったのか、シヤナはかつて無いほどに怒りを露にした。

「何を考えている？こっちが聞きたいね！！ソイツらのせいで事態は混乱。只でさえ問題が多いのに裏切り者の始末までしなきゃならない。まったくいい迷惑だよ。」マクスウェルの表情はさっきとは違い憎悪を露にしていた。

「で、他に質問は？」

マクスウェルまたいつもみたいな笑みを浮かべていた。

「……………」

「……………」

《……………》

いろんなことがありすぎたせい、三人はそのまま黙ったままだ。

「それじゃあ後の事はアンデルセンに聞いてくれ。私は帰るよ。」

そう言ってマクスウェルは立ち上がり退出した。

「ああそれと、君たちの荷物なんだが、手違いがあったらしくて明日にならないと届かないらしいんだ。」

「「え？」」

二人は声を合わせて驚いた。

「なんなら無茶を言わせて今日中に着くよう手配しようか？」

「別に大丈夫よ。着替えくらいしか入ってないから。」

シャナは素っ気なく答えた。

「そうか。まあ、必要になったら連絡してくれ。」

「どっつするっ。」

悠二がシャナに問いかける。

「ま、1日くらいなら我慢できるわ。浄めの炎もあるから風呂は無くてもいいし。それに戦闘に必要な物はすべてここにあるわけだし。」

確かにシャナの武器は普段は夜笠の中にあるし、悠二のブルートザオガーマーシヨリーからもらったしおりの中にあるので何ら問題

はない。

「それじゃあ神父さんを探すか。」

悠二はすっかり冷めた紅茶を飲み干してシャナと一緒に部屋を出ていった。シャナと悠二はシスターにアンデルセン神父は庭にいと聞いたので早速向かった。

庭で元気よく遊んでいる子供たちを見るとシャナはまた本当にあの神父がいるのかと疑い始めた。その疑問に悠二は苦笑いで答えるしかなかった。

そして探してみると、いた。

どうやらケンカしていた子供たちを叱っているみたいだ。

悠二はイタリア語がわかるシャナに通訳を頼んだ。

「やめなさい二人共！！友達に暴力をふるってはいけません！！そんなことでは二人とも天国には行けませんよ！！！」

「ええ~~~~~~~~！！！」

「ごめんなさい神父さま！！ごめんなさい！！！」

そのほのぼのとした光景は悠二とシャナの顔に微笑みを浮かばせた。心なしかアラストールも微笑んで見える。

「いいですか、暴力をふるっていいのは化け物共と異教徒共だけですよ」

「……………」

《…………》

その発言がすべてをぶち壊した。

「どうしたの？」

イタリア語がわからない悠二は急に黙ったシャナとアラストールを不思議に思う。

「な、何でもないわ…」

《う、うむ…………》

「？」

それからアンデルセンはシャナたちに気づき、ケンカしていた子ども二人を庭にかえした。

「で、話しは済んだのか？」

「はい」

「そうか……それじゃあ早速だが、今夜吸血鬼を退治してもらう。」

そのセリフにシャナと悠二の顔が引き締まる。

「場所は北アイルランド地方都市ベイドリック。その吸血鬼と喰屍人共を殲滅してもらう。それと私も同行しよう。」

「私たちだけじゃ不安？」

「ハハハ、いやなに俺は違う客人を相手にしなきゃならんのでな」

「違う客人？」

「ああ、お前たちもきつとこれから世話になるから挨拶ぐらいはしておきましょう」

北アイルランド 地方都市 ベイドリック 近郊 屋敷二階

「ちい、小娘ごときに……！」

目的の吸血鬼がシャナに襲いかかる。だが

「あんだ遅すぎるのよ!!!」

シャナはすぐさま相手の後ろにまわり、その首を跳ねた。

《うむ、あの神父の言った通りだったな。》

シャナは事前にアンデルセンに言われた通り極限にまで集中力を研ぎ澄ませ、まったく隙を作らなかった。それが勝因と言えよう。だがそのあまりにもあっけなすぎる勝利は逆にシャナを不安にさせた。

(それにあいつは“違う客人”とやらについても教えてくれなかった)

《あの神父は主犯の吸血鬼を倒せば喰屍人も消滅すると言っていたな。》

「でも油断はできない」

《そつだな。とりあえず悠二と合流しよう》

アンデルセンも探そうとしたが彼はさつきから姿を消したまま。おそらく我々を監視もしくは試しているのだらうとアラストールは推測していた。

同刻屋敷一階

廊下は喰屍人で一杯になっていた。その中で悠二は1人ブルートザオガーを手に戦っていた。

「相手は人形、かぼちゃ同然、頭を斬ってそれで終わり……」

悠二も事前にアンデルセンに言われたことを忘れないよう復唱し続けていた。いや、どちらかといえば思い込ませるためと言えた。思えば御崎市でのヤンとの戦闘も自分が甘い考えを持ったせいでシヤナはあんな目にあつたのだ。もう二度とシヤナの足は引つ張らない、その思いが彼をここまで強くした。

「にしてもシヤナのやつ遅いな！これじゃあきりがない！！」

今の悠二は四面楚歌といった状態で、少しでも気をぬけばめでたく彼らの仲間入りである。

「うわ！？」

考え事をしていてすこし集中力が散漫したせいか、悠二は何かを踏んづけて転けた。

「しまっ」

喰屍人が悠二に襲い掛かろうとしたその時、喰屍人の首が一斉に斬り落とされた。

「悠二！！ケガは？」

間一髪でシャナが駆けつけたのだ。

「ああ、大丈夫。」

「全く、戦闘中に転けるなんて」

《まだまだ未熟だな》

「う、うるさいな！ってそれより吸血鬼は？まさか逃げられた！？」

《いや、吸血鬼は完全に倒したぞ。》

「え？でも、それならあの喰屍人は」

「わからない。もしかしたら、まだ吸血鬼がいるのかも。」

《アンデルセンが言っていた“違う客人”のことか……》

「とにかく、下の階に行ってみましょう。」

シヤナが下に向かおうとするなか、悠二は先ほど自分が転けた場所を見てみた。そこにはストローが刺してあるビニール袋があった。

「これって……医療用の、輸血袋？」

何故こんな所に？いや、それより何故ストローが？そんな疑問が頭を過ったがシヤナの声で我に帰り、そのことは後にしようと思った。一階は静まり返っていた。窓には結界が貼り付けられていたのでアンドンセンがこの階にいるのは間違いなかった。

ギジツ、ギシツ、廊下が軋む音が聞こえシヤナと悠二は構えた。何かがちらに向かって来る、その思考が緊張感をより高めた。しかし、歩いてきたのは女性、しかもかなり重傷の女性だ。なぜここに？答えはひとつ。

「なるほど、これが“違う客人”ね。」

吸血鬼、三人共この答えに行き着いた。

「だ、だれ？……どうし、ぐっ……子供が、こんなところ？」

女性は背中に突き刺さった銃剣を抜きながら問いかけた。

「?……あんた、あたしたちを知らないの?」

女性の態度を不思議に思ったシャナは質問を試みた。

「へ?いや、さっぱり」

「……………」

女性の答えに三人は戸惑った。

「その娘に手を出すな。そいつはうちの身内モンだ」

すると今度は違う女性がこちらに銃を構えて現れた。女性は軍服みたいな格好で、“女ボス”といった感じである。

「イ、インテグラ様!!!」

「セラス、アーカードはどうした?」

「そ、それがマスターが、マスターが……」

「ねえシャナ」

悠二と視線を合わせたシヤナは頷き、インテグラに視線を向けた。

「どうやら、あんたが親玉の吸血鬼のようね」

「は？」

「惚けたって無駄よ！！上の吸血鬼は倒したのにグールどもは死ななかつた。と、答えは他に吸血鬼がいること以外に考えられない！！」

「ちよ、ちよつと待て！私は吸血鬼ではないぞ」

シヤナと悠二はそのことをまったく信用していなかった。逆にさつきより警戒している。

《落ち着け二人とも。その女は吸血鬼ではない》

アラストールのその言葉に二人は驚いた。

「どういうことだよ」《感覚を研ぎ澄ましてみろ。傷を負った女の方の気配は吸血鬼のものだが、もう片方は明らかに普通の人間だ》

アラストールにそう言われ、二人は意識を集中した。

セラスの方は確かに吸血鬼の気配だった。普通の生き物とも紅世の徒とも違う、暗くて得体の知れない感じだった。

しかしインテグラは違った。威圧感は少しあるが、明らかに人間のものだった。

「そんな…」

「じゃあ、なんであたしが吸血鬼を倒したのにグールどもが悠二を襲ったのよ!?まさか」

シヤナはセラスの方に視線を向けたが、セラスはおもいつきり首を横に振ってそれを否定した。

「安心しろ。こいつは吸血鬼と言ってもまだ成り立てでな、まだ人間の血を一滴も吸ったことがない」

「そう、こいつらは人間は襲わん。そうだろ?ヘルシング局長インテグラ・ファルブルケ・ウインゲーツ・ヘルシング」

「!?!」

コツ、コツ、

とゆっくりと階段を一人の神父が降りてきた。そしてその神父は男の首を持っていた。

「アンデルセン神父!?!」

バチカンの切り札アンデルセン神父であった。

「あんた今まで何やってたのよ!?!」

アンデルセンを見るやいきなり罵声を浴びせるシヤナ。当然である。吸血鬼を倒せば喰屍人も一緒に死ぬと言ったのは彼なのだから。

「すまん、すまん。思ったより時間が掛かってな。」

《で、そこ客人とやらはどうした?》

アラストールの問いにアンデルセンは微笑みを浮かべて答えた。

「このとおりだよ。」

ドッ

と壁に銃剣が刺さった。だがその銃剣には手に持っていた男の首も一緒に刺さっていた。

人間の生首を見るのは初めての悠二は腰を抜かしシャナとアラストールは絶句した。

セラスはマスター、マスターと叫んでいる。

しかしインテグラは全く動じず、葉巻を吸っている。

「クックック、さすがはかのヘルシング局長。部下一人死んだくらいじゃあ動揺せんか。だが、貴様ら御自慢のアーカードが首を斬り落とされた今、勝ち目はないぞ。」

アンデルセンのそのセリフに今度は笑みを浮かびはじめた。

「フフフフ、」

「何が可笑しい?」

「首を斬り落とした？それだけか？」

その台詞と同時に無数の蝙蝠がアンデルセンに向かって飛んできた。

「なんだよこれ！！」

「この屋敷には蝙蝠なんぞいないはず」

《ただの蝙蝠ではないということか。二人とも、気を引き締める》

突然の蝙蝠に驚く悠二とシヤナ。アラストールはさすがと言つべきか、冷静に状況を判断し、二人の集中力を戻した。

蝙蝠が集まると、赤いコートを来た男が現れた。肌は白く、髪は肩くらいまでである黒髪である。瞳は妖しげに光っており、口元には牙があつた。

「吸血鬼！！」

シヤナは飛び掛かろうとしたが、理性が彼女を抑えた。あの吸血鬼はインテグラ達の仲間、そしてアンデルセンが言ったことがあの吸血鬼が喰屍人を生み出した張本人ではないことを示していた。

「シヤナ、あれ」

「大丈夫、きつとあれはこちらが仕掛けなければ」

平気だ、と言おうと悠二の方を振り向いた。だがその言葉が出てこなかった。

「なんなんだよ、なんなんだよあれ…あれは、本当に吸血鬼なのか……」

悠二は震えていた。いや、“恐怖していた”と言った方がいいだろう。以前の悠二ならともかく、幾多の修羅場をシヤナと共にくぐり抜けた悠二がここまで恐怖しているのだ。

あの吸血鬼の首が壁に刺さった時は“驚いて”腰を抜かした。だがこれは違う。一体あの吸血鬼は何者なのか、シヤナはただ考えるしかなかった。

「やあアンデルセン神父、また会えたな。」

赤いコートを着た吸血鬼 アーカード は楽しそうな笑みを浮かべていた。

「マ、マスター……!!」

セラスは喜びの声を上げた。

「大丈夫か、アーカード？」

「ああ、首をもがれたのは久しぶりだ。」

そう言ってアーカードはアンデルセンの方に向き直った。

「さあ、続きをやるつか」

アーカードはコートの懐から銀の銃を取り出した。しかしその銃は30cm以上はあろう巨大な銃だった。およそ人間が扱える得物ではなかった。

「どうした、先ほどの笑みが消えているぞ？」

アーカードが言う通りアンデルセンの顔には先ほどまでの笑みが無く、険しい表情がそこにあった。

「始めよう、と言いたいところだが」

「!?!」

「そろそろ出てきたらどうだ？見物ばかりというのも退屈だろう」

「なに!?!」

アーカードの言葉に全員が驚愕した。

そして何処からともなく白い炎が渦を巻き、そこから白いスーツを着た男が現れた。それはシャナ達三人がよく知っている男だった。

「久しぶりだね、おチビさん。それにミステスの少年」

「か、狩人フリアグネ…！」

《貴様は消滅した筈…！！》

それはかつてシャナが倒した紅世の徒、狩人フリアグネだった。

悠二とアラストールが驚きの声を上げる中、シャナだけは冷静にフリアグネを見つめていた。

「お前が紅世の徒か」

フリアグネが声の方を振り返るとアーカードが嬉しそうに笑っていた。

「やあ、はじめまして。ノスフェラトゥ吸血鬼アーカード」

「はじめまして、狩人フリアグネ」

挨拶を交わし、アーカードはすぐに銃を向けた。

「まあ、待った。僕は今君とやり合う気はないよ。あくまでデータ収集が目的でね。」

「あら、それは残念」

そう言ったのはアーカードではなく、シヤナだった。

顔は少し笑っており、刃はフリアグネに向けられていた。

「挑発しても無駄だよ、炎髪灼眼。君を倒すのはもう少し後だ」

「君もだよ、アーカード。それに今の装備では君を倒しきれない。その神父が気付いているようにね」

「……」

「では近い内にまた会おう」

そう言うとフリアグネはまた白い炎に包まれ、消えてしまった。

「さて、どうするイスカリオテ？化け物はここにいるぞ」

アーカードは両腕をおおっぴらに広げアンデルセンを挑発した。

「さっきの徒が言った通り今の装備では貴様を殺しきれんのでな。出直すでしょう」

「待て、アンデルセン神父。協定違反による越境戦闘、機関員に対する攻撃・殺傷行為、この大貸しをどうしてくれるつもりだ？」

インテグラのその質問にアンデルセンは簡単に答えた。

「その三人をお前達にやろう」

「『《は？》』」

シヤナと悠二とアラストールは自分たちの耳を疑った。

「いいだろう、それでチャラだ」

これまたインテグラも簡単に了承した。

「『《え~~~~~!!!!!》』」

「ではまた会おう。次は皆殺しだ」

そう言ってアンデルセンは書物を取りだし、その一ページ一ページが宙を舞い、姿を消した。

バチカン第13課局長室

「どういっつもりだアンデルセン!!」

机をおもいつきり叩き、イスカリオテ局長マクスウェルは声を張り上げている。

「なぜあんな勝手な行動に出た！！あの二人には法王猊下から監視しておけと命令が出ているんだぞ！！」

その発言にアンデルセンはマクスウェルを少し睨んだ。

「マクスウェル、それは猊下が直接お前に言ったのか？」

「いや、司祭殿を通じて私の方に……！！まさか」

コンコン、と部屋のドアがノックされた。

「失礼します」

部屋にサングラスを掛け神父の格好をした青年が入ってきた。

「どうした、ハインケル」

ハインケルと呼ばれた青年は報告書をマクスウェルに渡した。

「……クツクツクツクツ、そうか、そういうことか」

その報告書を読むやマクスウェルは急に笑いだしたが、次の瞬間には鬼のような形相に変わっていた。

「覚悟しておけよ、ウジ虫どもめ……！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9614g/>

INTERSECTION

2010年12月25日02時05分発行